

梅毒歯について*

本 間 邦 則**

晩発性先天性梅毒についてハッチソンは、1) 永久前歯の異常形成、2) 実質性角膜炎、3) 内耳性難聴をその徴候として報告した¹⁾。その後、晩発性先天性梅毒の歯の形態異常については H. Moon および J.A. Fournier などによっても報告され、永久前歯のみならず臼歯部にも観察されることが知られている。しかし後者の報告については、「フルニエ歯、ムーン歯、ゴーシュ歯ともよばれる、上下の第1大臼歯に先天性梅毒のさいなどに現われる。咬頭の発育不全、歯冠の萎縮があり、アメリカで桑実臼歯とよばれる²⁾」、「フルニエ歯：ムーン歯、桑実状臼歯、蕾状臼歯：Jean Alfred Fournier (1832~1915, 皮膚, 仏), Henry Moon (1845~1892, 外科, 英), 先天性梅毒患者の第1大臼歯, 第2乳臼歯にみられ、歯冠が短く咬合面に向かってすぼまり、咬頭が萎縮性で皺壁をつくり、桑実状あるいは蕾状を呈する。成り立ちには諸説があるが、先天梅毒児歯胚にスピロヘータと梅毒性炎が存在することから、スピロヘータあるいはその毒素の、歯胚への直接障害によるものと考えられている³⁾」、「臼歯の異常は Fournier (1884) および Moon (1884) によって始めて注目されたもので、第1大臼歯および第2乳臼歯に主にみられる。桑実状臼歯 mulberry といわれるものは咬頭の発育不全があって、その表面が顆粒状の凹凸を示すものである。蕾状臼歯 bud molar, Knospenmolar (Pfluger 1924) は桑実状臼歯より変化が軽く、咬頭の発育不全のために咬頭が内方にまきこまれたような外観を呈する

が、その表面は比較的滑らかなものである。いずれの場合も歯頸部の大きさは大体正常であるが、咬頭が小さい⁴⁾」などのように記述されている。さきに私はハッチンソンの歯について報告した⁵⁾が、これに若干の追加をしたいと思う。

ムーン歯について

Henry Moon (1845~1892) は歯の形態異常について報告し、梅毒による症例についても述べた⁶⁾。家族歴、既往歴および現症を精密に診査した結果、先天性梅毒と診断した患者の歯の形態所見について観察している。ハッチンソンが述べているような前歯の形態異常は、上顎切歯において典型的なものがみられるが、下顎切歯では稀有のものであると考えられる。第1大臼歯においては普通の形よりも非常に平たくなって小型になり、もっと丸屋根型 (dome-shaped) のものがみられる。これらの歯の象牙質はエナメル質で被覆されているが、よく咀嚼に関係する部分はうすくなっているという。

梅毒の治療に用いた水銀剤の歯の形成異常にあたる影響について、ハッチンソンは否定的な意見であるが、Moon はそれと対立している。Moon は水銀剤は確かに有効であり必要であるが、使用する際には注意すべきことを説いている。彼の症例に水銀剤の応用していることが多いことから、これらの歯の形成異常は水銀剤の影響もあるかも知れないとしている。

先天性梅毒における大臼歯の形態異常についての報告は、Moon によるものが最初らしい。

Moon についてはイギリスの外科医³⁾と記載されているが、歯科医学についても造詣が深かったようである。Moon の履歴についての詳細は今

* O the Syphilitic Teeth.

** Kuninori Homma: 日本歯科大学新潟歯学部史料室 The Nippon Dental University School of Dentistry at Niigata

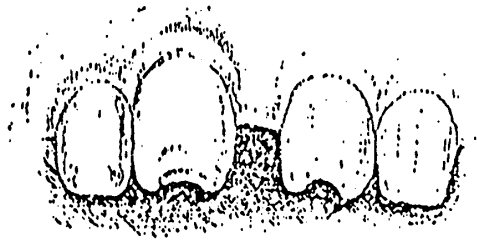


図 1 Hutchinson の報告した梅毒歯¹⁶⁾

後も調査を続けたいと思う。

フルニエ歯について

Jean-Alfred Fournier (1832~1914) は梅毒罹患者にみられる歯の異常形態について、詳細に報告している⁷⁾。梅毒歯には Erosion が多いこと、歯の異常形態として矮小形の多いことを指摘し、これを Microdontism (small tooth の意) と呼称している。第 1 大臼歯の歯冠形態が平坦であることに注目し、これは Chaboux の述べている「Worn Flat」と同様のものとしているが、Moon の報告には言及していない。そして梅毒歯は齲蝕になりやすいことを注意している。

Hutchinson, Moon, Fournier らの論文には inherited syphilis あるいは hereditary syphilis の語が用いられているが、さらに Fournier は congenital syphilis の用語も記している。この時代、すなわち 19 世紀末からこのように表現されるようになってきたのであらうと思われる。

Fournier は、Parrot の意見を引用しているが、Parrot とは Joseph Marie Jules Parrot (1839~1883) のことであらう。Parrot はフランスの小児科医であり、先天性梅毒児におけるパロー偽麻痺 pseudo-paralysie de Parrot, Parrot's pseudo-paralysis やまたおなじく先天性梅毒児にみられるパロー裂溝 cicatrices de Parrot, Parrot's furrow などにその名を留めているが、その生涯は短かった。

Fournier はパリの Hopital St. Louis の皮膚科、性病科の医師として著名で、梅毒に関する研究業績は多く、とくに先天性梅毒についての「La syphilis héréditaire tardive, Paris, G. Masson, 1886 (明治 19) がその集大成として知られてい

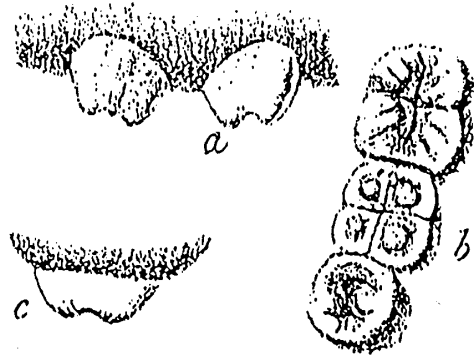


図 2 Moon の報告の梅毒歯⁸⁾

- a) 上顎切歯
- b) 下顎第 1 大臼歯
- c) 上顎第 1 大臼歯 (近心面)

る。

フルニエ歯をゴーシェ歯と呼ぶこと²⁾については明らかではない。

フルニエ歯はまたサブロー歯と称することがある⁷⁾が、サブローとは Raymond Jacques Adrien Sabouraud (1864~1938) のことであらう。彼はフランスの皮膚科医で、真菌の分離培地として知られるサブロー培地 Sabouraud's medium にその名を残している⁸⁾。しかし、梅毒歯についての報告がいつおこなわれたかについては明らかではない。

梅毒の病原体の発見は 1905 (明治 38) 年に Fritz Richard Schaudinn (1871~1906) と Erich Hoffmann (1868~1959) の研究によっておこなわれ⁹⁾、つづいて 1906 (明治 39) 年には August von Wassermann (1866~1925) によって血清反応による梅毒の診断法が発表され¹⁰⁾、20 世紀にはいつてからは梅毒を撲滅すべく途が開かれた。そして 1910 (明治 43) 年にドイツの Paul Ehrlich (1859~1915) と日本の秦佐八郎 (1873~1938) による特効薬サルバルサンの発見により¹¹⁾、梅毒はようやくして征服されることになる。

歯の形成異常についても、ある時代には梅毒診断の一助であったかも知れない。しかし現在では歯科臨床においては観察することがなくなっている。歴史的な疾患の一つとなったのであらう。梅毒歯について簡略に追加し、紹介した。梅毒歯の

研究報告者の履歴については、未だ詳細について知られていないところもあるので、今後も追究してゆきたいと思う。

参考文献

- 1) A) Hutchinson, Jonathan: Report on the Effects of Infantile Syphilis in Marring the Development of the Teeth, Trans. Path. Soc. Lond., 9: 449-456, 1858.
B) Hutchinson, Jonathan: A Report on Malformations of the Teeth, as indication of Diathesis, Trans. Path. Soc. Lond., 10: 287-299, 1859.
- 2) 石川梧朗, 他: カラー版歯学大事典, p. 649, 永末書店, 京都, 1976.
- 3) 後藤 稔, 他: 最新医学大辞典, p. 1271, 医歯薬出版及, 東京, 1987.
- 4) 石川梧朗, 他: 口腔病理学 I, p. 83-84, 永末書店, 京都, 1966.
参考文献としてつぎのように記載している。
Fournier, A.: Syphilitic teeth, Dent. Cos. 26: 12, 81, 141, 1884.
Karnosh, L.T.: Histopathology of Syphilitic hypolasia of the teeth, Arch. Dermat. & Syphil., 13: 25, 1926.
Moon: Cited from Karnosh.
- 5) 本間邦則: ハッチンソンの歯について, 日本歯

- 科医史学会々誌, 10: 67-72, 1983..
- 6) Moon, Henry: On Irregular and Defective Tooth Development, Trans. Odont. Soc. G.B., n.s., 9: 223-243, 1876-77.
 - 7) Fournier, Jean-Alfred: Syphilitic teeth, Dent. Cos., 26: 12-25, 81-91, 141-155, 1884 (これは Fournier の原著を J. Wm. White が英訳して Dent. Cos. に掲載したものである。なお、この英訳文献には図譜はない。)
 - 7) Hoffmann-Axthelm, Walter: Lexikon der Zahnmedizin, p. 277, Quintessenz Verlags-GmbH, Berlin, 1983.
 - 8) Talbott, John H.: A Biographical History of Medicine, p. 1111~1112, Grune & Stratton, New York, 1970.
 - 9) Schaudin, Frit Richard & Hoffmann, Erich: Vorläufiger Bericht über das Vorkommen von Spirochaefen in syphilitischen Krankheitsprodukten und bei Papillomen, Arb. K. Gesundh. Amte, 22: 527-534, 1905.
 - 10) Wassermann, August von: Eine serodiagnostische Reaktion bei Syphilis, Dtsch. med. Wschr., Berlin, 3: 745-746, 1906.
 - 11) Ehrlich Paul & Hata, Sahachiro: Die experimentelle Chemotherapie der Spirilloesen (Syphilis, Rückfallfieber, Huhnerspirillose, Frambösie), Berlin, J. Springer, 1910.